



『後撰和歌集』(部分) 日光二荒山神社所蔵 重要文化財
 (絶句之が桜川を詠んだ和歌は最初の2行)



望遠の山波筑りよ川櫻 (所名前土)

絵葉書「(土浦名所)桜川より筑波山の遠望」

桜川の景観

く名実ともに真の桜川へく

絵葉書「土浦名所 桜川より筑波山の遠望」です。桜川の流れてに棹をさして進む船の先に筑波山の雄大な姿がそびえますが、左下には次のような歌が記されています。

つねよりも春べになれば桜川

波の花こそ間なくよすらめ

春になると桜川に散る桜が、水面にすきまもなく寄せている情景が詠まれています。平安時代、桜川というところがあることを聞いた紀貫之が、その風景を思い浮かべて詠んだ和歌で「後撰和歌集」におさめられました。

ここという桜川とは、上流の磯部稲村神社(桜川市磯部)やその周辺の情景で、桜川の名前の由来もこの地にあります。人買いに身を売ったわが子を探しもとめて九州から旅にでた母が、桜川で再会を果たすという謡曲「桜川」の舞台としても有名です。桜川の名前と上流の美しい情景は、古くから人々に知られていたのです。磯部の「桜川のサクラ」は国指定名勝に、「桜川句」など11品種は、国の天然記念物に指定されています。

一方、最も下流に位置する土浦の桜川には、「花もないのに桜川、水もないのに荒川沖」と形容されたように、まとまった桜の存在はありませんでした。土浦の桜川堤防に桜が植えられたのは明治時代末期からのことで、大正天皇や昭和天皇の即位記念などで植え継がれ、中心となった品種はソメイヨシノでした。ソメイヨシ

ノは江戸時代末期に作られた園芸品種で、ほかの桜に比べて成長が早く、花が一斉に咲きそろふことから、公園や学校、官庁、神社など近代における都市の景観整備でさかんに利用されました。

明治末期から昭和初期にかけて植えられ、「名実ともに真の桜川」となった桜川堤の桜が全盛期を迎えたのは、昭和10年前後でした。長堤に延々と連なる桜の風景は、「花は名実ともに関東一」、「桜川の名に負う花の新名所」などと称され、古くから知られていた桜川の名前にふさわしい景観となりました。当時の土浦へは筑波山登山や水郷めぐり、海軍航空隊の見学などで訪れる観光客が多く、「桜川堤の桜」はこうした遊覧客を楽しませる新名所(観光資源)として見いだされていくこととなります。

市立博物館では、5月6日(火)まで第29回企画展「土浦桜物語―サクラに読みとく土浦近代史―」を開催中です。昭和10年ごろの「桜川堤の桜」を中心に、土浦の近代史をひもとく展覧会ですが、あわせて桜川の由来や謡曲「桜川」についてもご紹介をしています。4月20日(日)までは、日光二荒山神社所蔵の「後撰和歌集」(平安時代、現存する最古の写本で国指定重要文化財)を特別展覧します。また、4月5日(土)は記念講演会「桜の春ができるまで 花と人の歴史」を開催します。ぜひご来場ください。

市立博物館 ☎ 824・2928

